

加津佐町文化財調査報告書第1集

辻 貝 塚

1991

長崎県加津佐町教育委員会

加津佐町文化財調査報告書第1集

辻貝塚



発刊にあたって

加津佐町野田名辻に在る、野田保育園がプールを建設するための敷地造成中、土器の破片が出土したとの報告を受けましたので、県教育委員会文化課に連絡しましたところ、調査する必要があるとのご指導を受けましたので、緊急に発掘調査を実施しました。

調査の結果。つば、かめ、高杯や土器類等の破片が9千点以上と、礫器等の石器類も数点発掘されました。

また、柱が立てられていたと考えられる、柱穴が約20箇所、V字形の遺溝もみつかりました。

このような出土品等の状況から、弥生時代後期の前葉から弥生時代終末の方形にめぐる溝で区画した居住域をもつ遺跡であることが判明しました。

出土した数々の土器類や今も残る燃え跡の黒い土、それにV字形の遺溝をまのあたりにする時、はるか2千年前の大古の先人の暮らしが偲ばれ新たな感動を覚えます。

この度の調査によって、わが町の古代史の貴重な資料を得ることができました。

そこで、県教育委員会文化課のご協力を得まして、調査報告書にまとめ発刊することにしました。

この報告書が、わが町の、古代と現代を結ぶタイムカプセルとなって多くの日にふれ活用されることを願う次第であります。

最後になりましたが、この調査のため、プール建設工事を中断してご協力賜わりました、野田保育園の宮崎園長さん並びに、盛夏の暑さ厳しい中にご指導賜わりました、文化課の安楽主任文化財保護主事・村川文化財保護主事の両先生に衷心より感謝申し上げまして発刊のことばといたします。

平成3年3月31日

加津佐町教育委員会
教育長 林 田 健 一

例　　言

1. 本書は、平成2年度の町単独事業として実施した、長崎県南高来郡加津佐町野田名辻1,180番地他に所在する辻貝塚の緊急発掘調査報告書である。

2. 調査は、加津佐町教育委員会が事業主体となり、県教育委員会が調査を担当した。1次調査は平成2年6月7日～6月9日迄で、安楽勉が担当し、2次調査は同年6月20日～6月25日迄で、村川逸朗が担当した。

3. 調査関係者は以下のとおりである（平成2年度時）。

加津佐町教育委員会	林 田 健 一	教育長
	相 良 司 郎	教育次長
	松 藤 幸 利	社会教育主事
	平 木 清 隆	主任主事
長崎県教育庁文化課	安 楽 劇 勉	主任文化財保護主事
	村 川 逸 朗	文化財保護主事
調査協力者	宮 崎 幸 雄	野田保育園々長

4. 本書は、I、III-2を安楽・村川、III-3、Cを安楽、III-3-bを寺田正剛長崎県教育庁文化課文化財保護主事、III-1、III-3-a、IVを村川が担当した。

5. 調査時の写真撮影は、安楽、村川、遺物整理と整理後の遺物写真は寺田による。

6. 遺物の実測は、川脇いつ子、森崎京子、山下弘美が行い、トレースは、村川、下田章吾が行った。

7. 本書の編集は、村川による。

8. 本書関係の遺物は、現在長崎県教育庁文化課立山分室にあるが、まもなく町教育委員会へ返還される予定である。

本文目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の地理的歴史的環境	2
III. 調査	2
1. 土層	2
2. 遺構・遺物の出土状態	9
3. 遺物（壺・甕・高杯）	9
a. 土器	9
b. 器台・支脚・管状土鉢	15
c. 石器	20
IV. まとめ	24

挿図目次

第1図 加津佐町内の遺跡	3
第2図 1次・2次調査区配置図 1/500	5
第3図 1次・2次調査遺構検出状況 1/750	7
第4図 辻貝塚出土の土器① 1/4	11
第5図 辻貝塚出土の土器② 1/4	13
第6図 辻貝塚出土の土器③ 1/4	14
第7図 辻貝塚出土の土器④ 1/4	16
第8図 辻貝塚出土の土器⑤ 1/4	18
第9図 辻貝塚出土の土器⑥ 1/4	19
第10図 辻貝塚出土の砾器 1/3	20
第11図 辻貝塚出土の磨石・敲石 1/3	22
第12図 辻貝塚出土の磨石・敲石・石皿 1/3	23
第13図 「八郎潟の漁撈習俗」	25

図版目次

図版1 1次・2次調査風景

- 図版2 2次調査方形区画の溝検出状況
- 図版3 1次調査土層と遺物の出土状況
- 図版4 2次調査遺物の出土状況及び遺跡見学風景
- 図版5 辻貝塚出土の土器①
- 図版6 辻貝塚出土の土器②
- 図版7 辻貝塚出土の土器③
- 図版8 辻貝塚出土の土器④
- 図版9 辻貝塚出土の土器⑤
- 図版10 辻貝塚出土の土器
- 図版11 辻貝塚出土の土器

I. 調査に至る経緯

辻貝塚は、北東から南西に向ってゆるやかに伸びる標高20mから30mの丘陵に位置し、野田浜を経て天草灘を見下ろすことができる。丘陵の南側一帯は平野が開けているが、古くは海水が流入した低湿地帯である。貝塚は古くから知られており、畑や道路の断面から土器片や石器、貝殻片が採集されている。野田小学校造成工事や町道開設工事の際にもかなりの遺物が出土したことが伝えられているが、特別な保護策もなされないままに至っている。昭和58年の県内遺跡詳細分布調査では、これまで漠然とした遺跡の範囲をかなり広い面積で捉えている。

今回の調査のきっかけであるが、小学校南側に野田保育園がある。現在の敷地面積では手狭になつたため、すぐ東側に運動場、プール、遊戯室、駐車場等を建設する計画をたて、先ず造成工事を行うため、周囲の擁壁工事を始めた。ところが水田の断面を切ったり、下に掘り下げたりしているうち、土器などが出てきた状である。幸いにも工事関係者の中に興味のある人がおり、土器を小学生に持たせ、学校に届けたのである。学校から町教育委員会へ連絡があり、さらに県文化課へ報告がもたらされた次第である。

造成地は周知の遺跡でもあり、緊急の処置として工事を中断されるよう町教育委員会から保育園に要請された。県文化課では、急拠安楽を現地に派遣し今後の対応にあたらせた。

現地では、造成地の擁壁工事は25mを残して終つており、調査を必要とする箇所は壁の長さ25mと幅1.5mと、プール予定地の10m×15mの2箇所であった。調査の期間が問題となつたが折しも田植時期と重なり、擁壁工事を急がなければ、周辺の水田の植付けが出来ないことがわかり、壁部分についてはとりあえず緊急に調査することになり、プールの方は改めて期間を設定することになった。

第1次の調査は平成2年6月7日～6月9日の3日間実施した。長さ25m、幅1.5mの水田の縁辺部分である。調査を進めて行くと、土器が多く出土し、礫器や磨石なども含まれる。また遺構については、V字溝や浅い土壙、柱穴などが検出され、弥生後期の集落が立地していたことが窺えた。

第2次の調査は同年6月20日～6月25日の6日間実施した。包含層である黒色土層より上層は無遺物層であることが第1次の調査で確認されていたので、包含層は搅乱しないように2層上面の灰色土層までを重機（掘削機）で剥がして、6m×12mの調査区を設定した。

遺物の出土状況は、第1次調査に比べて少なかつたが、発掘を進めていくうちに幅1m、深さ70cmの溝を検出し、その溝も7m程西側へ進み、そして、ほぼ直角に南へ折れていく状況が確認された。また、東側にも、2m50cm程の間隔をおいて同様の溝があり、1m50cm程伸びたところで調査区外となり、その先はどの様に伸びるかはわからない。もし、1次調査のV字溝とつながるとすれば（もちろん、北東の隅が直角に曲がるかどうかを確認してからのことであるが）、1辺18m程の区画で、方形に溝がめぐることも予想された。

II. 遺跡の地理的歴史的環境

辻貝塚が所在する加津佐町は、島原半島南端の西寄りに位置し、北に彦山、北東に壇上岳、南東に愛宕山、富士山があり、南西は天草灘に面している。町内には小松川・堀川等が流れていって、灌漑用水として利用されている。堀川は中流部に狹小な谷底平野をつくり、下流部は野田浜砂丘と前浜砂丘の後背湿地を旧備時代に干拓した低地となっている。地名の由来については、上津佐と書かれたこともあるところから口之津に対しての上の津の意味によると考えられている。

津波見海岸からは洪積世のナウマン象の化石が出土。永瀬・辻・千樟・内野の4箇所に貝塚がある。内野貝塚は縄文時代～弥生時代にわたるもの。他の3箇所は弥生時代を主体とする。

中世では、古城跡が六反田名にあり、城主は越中氏というが不詳。寺院跡としては、水月名天辺に正平13年（1358）に大智禪師が開山した円通寺跡がある。キリスト教関係では、野田浜キリスト教墓碑と須崎キリスト教墓碑があり、水月名天辺の円通寺の南にコレジヨ跡があった。このように、島原半島南端の加津佐は、2km程離れた口之津とともにキリスト教時代の伝統も併せもった地である。

〈参考文献〉

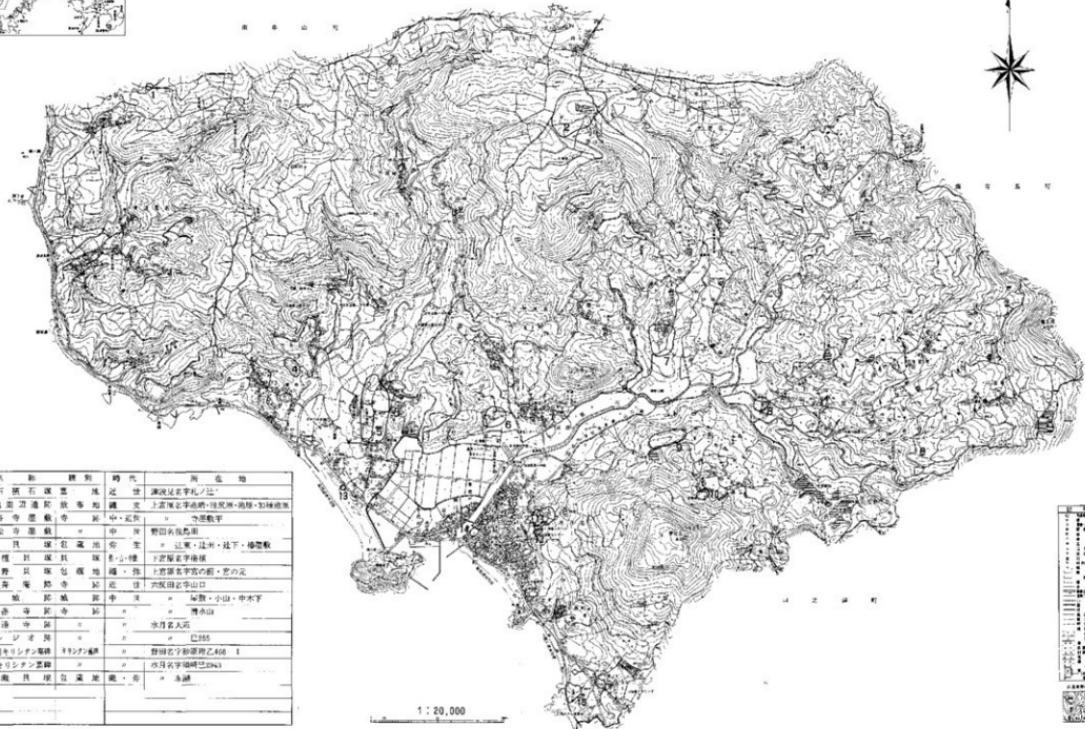
- 『角川日本地名大辞典』 42 長崎県 角川書店 p.p.286
『土地分類基本調査』 口之津・三角 5万分の1 国土調査 長崎県 1976

III. 調　　査

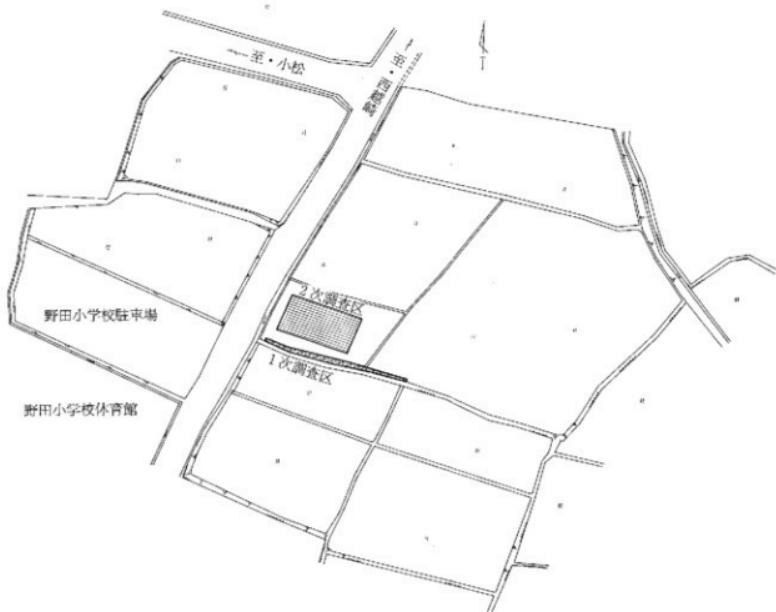
1. 土　　層

土層は整層をなし、6層に分かれる。

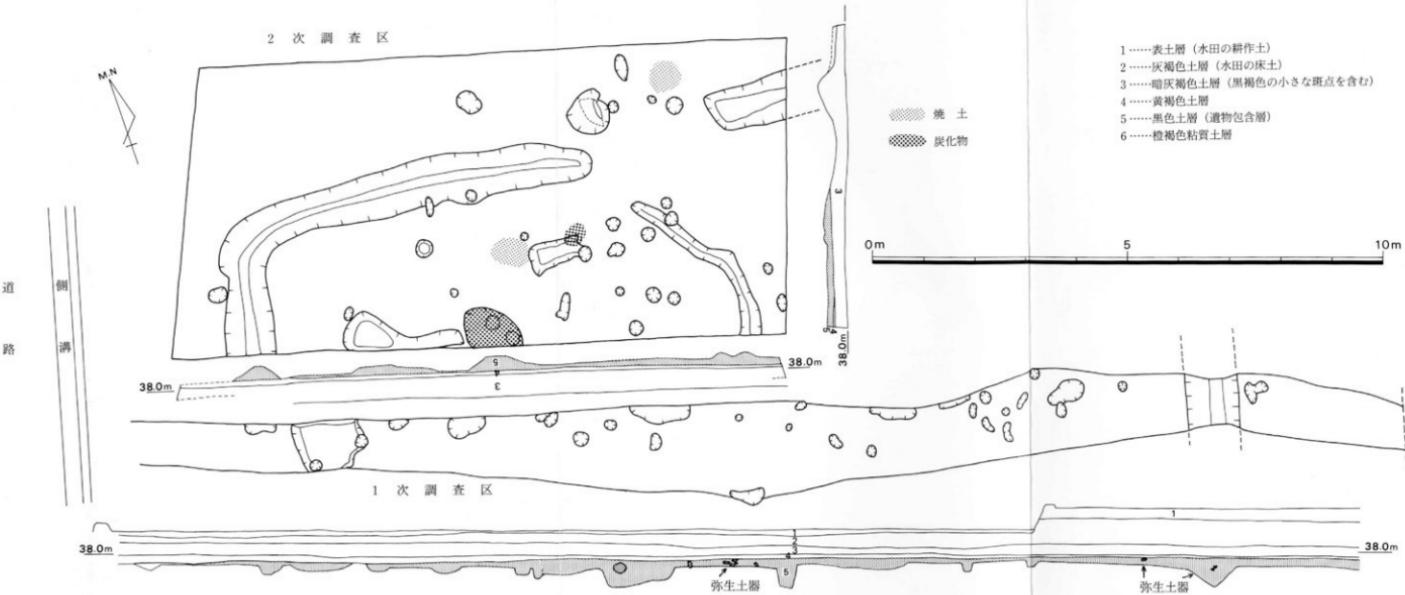
- 1層………表土層（水田の耕作土）
- 2層………灰褐色土層（水田の床土）
- 3層………暗灰褐色土層（黒褐色の小さな斑点を含む）
- 4層………黄褐色土層
- 5層………黒色土層（遺物包含層）
- 6層………橙褐色粘質土層（基盤層）



第1図 加津佐町内の遺跡



第2図 1次・2次調査区配置図 1/500



2. 造構・遺物の出土状態

a. 1次調査

調査地区的土層の堆積状態は良く6層に区分され、遺物は5層の黒色土層に包含される。造構は、5層から基盤層である6層の橙褐色粘質土層へ掘り込まれている。

V字溝は現水田の中央部にあたる部分に東西に検出された。底が平坦なV字形をしており深さ50cm程しか残らないが、原形は深いと思われる。土壙と思われるものが2箇所、柱穴は20箇所以上が確認され、その多くに土器片がみられた。各造構の関連については調査面積が狭いこともあり不明である。

遺物は土器が多量に出土した。土器溜りと思われる部分もある。V字溝からも出土しているが、底の部分からは少ない。器種も変化に富んでおり、壺・壺・高杯などで、弥生後期前葉から終末にかけてである。石器は礫器・磨石・凹石等で土器に供伴するものである。調査面積は約36m²。

b. 2次調査

1次調査区の1m北側に設定した調査区であるが、1次調査区でみられたような土器溜りも認められず、出土する土器も小片が多くいた。調査を進めていくうちに溝を検出したが、その溝は幅1m、深さ70cm程で西側に7m程直進し、ほぼ直角に南へ折れていく状況が確認された。また、東側にも2m50cm程の間隔をおいて同様の溝があり、1m50cm程伸びたところで調査区外となる。溝からは底から浮いた状態で管状土錐等が出土した。また、大小さまざまな柱穴が26箇所程と、土壙が2箇所(うち1箇所は土壙内より炭化物が検出された)。他には上が赤く焼けた部分も検出されている。調査面積は72m²。

3. 遺 物

本遺跡からは、弥生時代後期を主体とする壺・壺・高杯等の土器の他、管状土錐・器台・支脚、石器として礫器・磨石・凹石等。その他の遺物としては、鉄滓・陶磁器・炭化物等が出土している。他には微量ながら弥生時代前期と中期の土器、そして古墳時代の須恵器等も出土している。出土点数は、1次調査で土器9,712点、須恵器4点、石器5点、その他の遺物として鉄滓8点、陶磁器3点、炭化物1点、総点数9,733点である。2次調査では土器4,877点、須恵器3点、石器10点、その他の遺物5点の4,895点で、同じく2次調査での溝中からは、土器が244点出土している。

a. 土 器

1. 壺

壺は口縁部の形状により、(1)二重口縁壺、(2)口縁部が帆顔状にひらく外反口縁壺の二種類が

ある。

1～4は口縁部が朝顔状にひらく外反口縁壺で、口縁端が肥厚せず、頸部と同じ厚さでおわっているもの1、2と、口縁端が肥厚・拡張されているもの3、4がある。

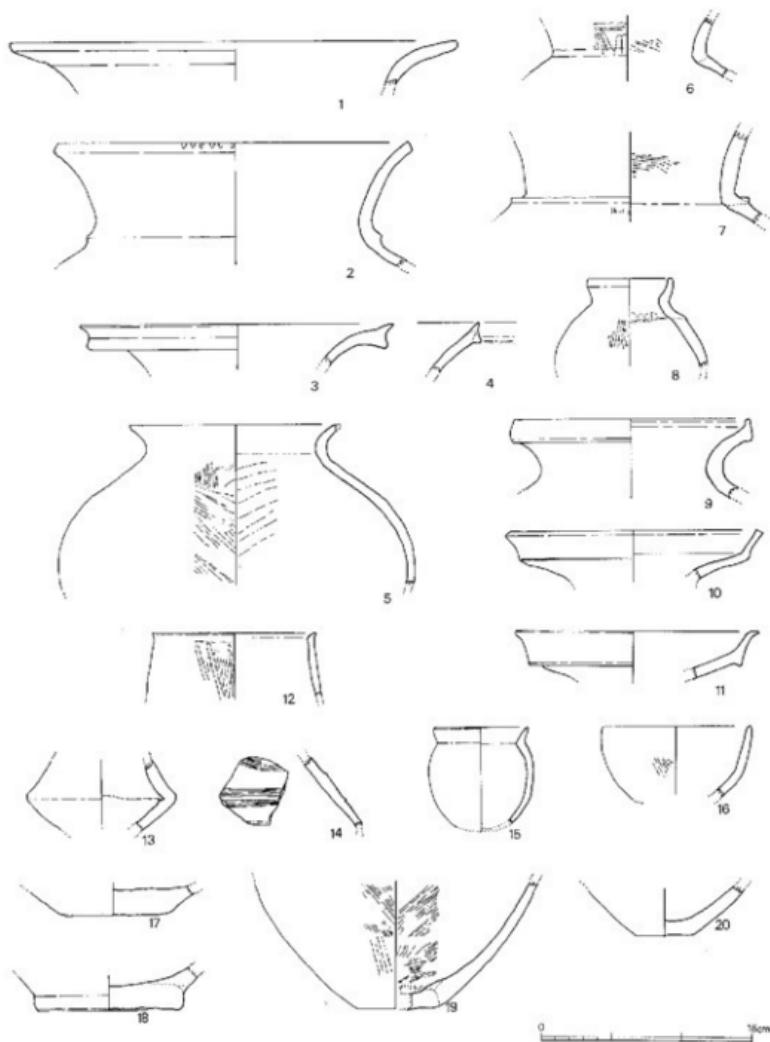
1は明黄褐色を呈し、微砂粒を含み、焼成は堅緻である。頸部外面に刷毛目調整を施しており、口縁部外面は横ナデ調整されている。2は明赤褐色を呈し、砂粒を含む。口縁端部に刻み目を入れ、頸部下端に断面三角形の突帯をめぐらしている。3、4は口縁端が肥厚・拡張されたもの、口縁外面は中凹みをみせる。3は灰褐色を呈し、黒雲母を含む。焼成は堅緻。4は赤褐色を呈し、砂粒等ほとんど含まず。口縁端が下側に肥厚し内側に稜線を形成する。5は灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。口縁端は欠けているが丸くおさめるものと思われる。内・外面に刷毛目を施す。これも外反口縁壺である。6、7も外反口縁壺の頸部で、6は灰褐色を呈し、砂粒等はほとんど含まない。外面にはナデ調整を施すが、頸部には縱方向のナデ調整を施す。7は明黄褐色を呈し、砂粒を含み、焼成は堅緻である。頸部と胴部の境界に断面三角形の突帯をめぐらす。

8～11は二重口縁壺。8は「く」字状に外反する頸部に、上方へ内湾ぎみにわずかに立ち上がる口縁部を付している。灰褐色を呈し、焼成は堅緻。内面に指押さえの跡、外面に刷毛目が残っている。9は8よりも二重口縁部の立ち上がりがやや大きい。指でつまんで引っ張り上げた感じである。灰褐色を呈し、頸部外面は斜め上方への刷毛目調整の後、横ナデされている。10は二重口縁部の立ち上がりが大きく、口縁端部は平らな面をなす。口縁端部内側にわずかな幅2mm程の沈線がある。赤褐色を呈し、微砂粒を含む。外面は横ナデ調整された面が一部残っている。11は10同様二重口縁部の立ち上がりが大きいが、下段の口縁部は突帯状に下方に張り出していく微細な刻み目を施している。淡赤褐色を呈し、微砂粒を含む。1～3、5、7、9は1次調査時の出土。4、6、8、10、11は2次調査時の出土である。

12は口縁部が小さく外反する鉢である。外面に縱方向の刷毛目があり、その上をナデ調整している。淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。13は袋状口縁壺。灰褐色を呈し、焼成堅緻。14は櫛描重孤文壺の肩部破片である。15はミニチュア壺である。手づくねの小形壺で、広口壺。赤褐色を呈し、微砂粒を含む。焼成堅緻。16は鉢である。椀状の鉢で、灰褐色を呈し、焼成堅緻。17～20はいずれも平底の壺の底部である。17は黒く焼けた部分があるが、淡赤褐色を呈し砂粒を含む。焼成は堅緻である。18は灰褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は堅緻。内底は剥落している。19は内・外面に刷毛目調整を施している。灰褐色を呈し、焼成は堅緻。20は淡赤褐色を呈し、焼成は堅緻。19、20とも砂粒はあまり含まず。12、13、17～20は1次調査時の出土。15、16は2次調査次の出土。

2. 壺

壺は弥生時代前期と中期の資料が各々1点づつ認められる他は全然ビ弥生時代後期に属するものである。後期の壺では、(1)、「く」字形口縁の屈曲部外面に一条の断面三角形の貼付突帯を



第4図 辻貝塚出土の土器① 1/4

めぐらすもの、(2)、黒髪式の壺、(3)、黒髪式系(在地系)の脚台付壺、(4)、「く」字形口縁をもち半底を有する北部九州系の壺等がある。

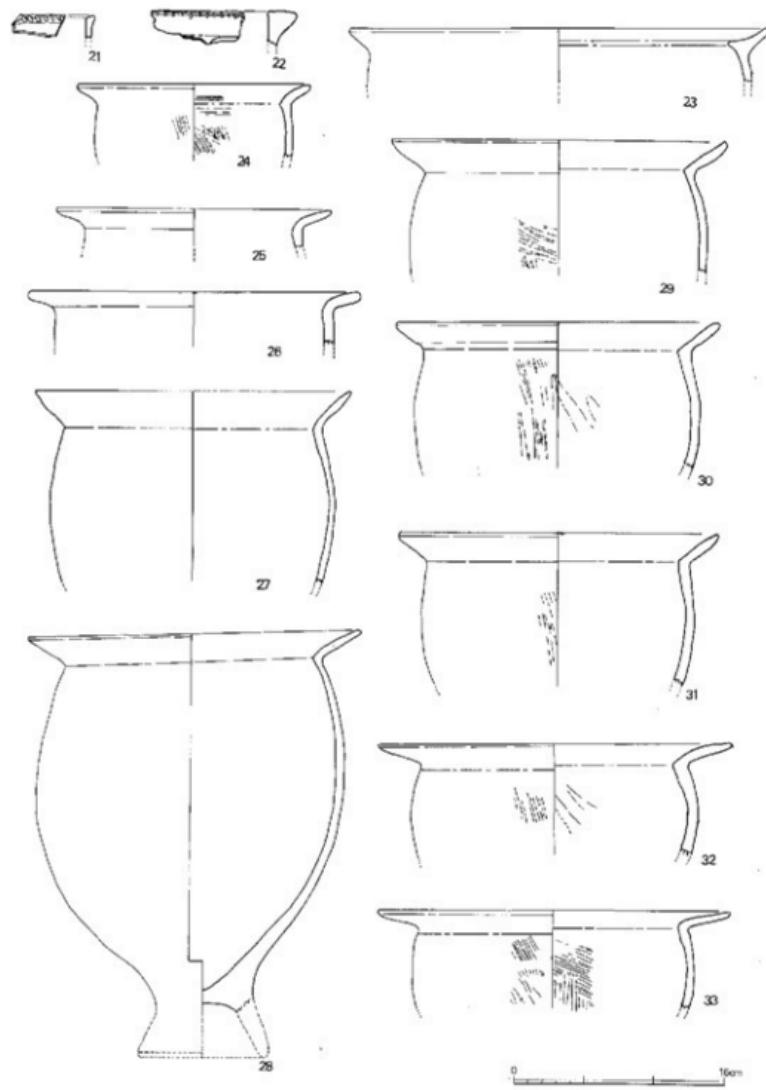
21は弥生時代前期の如意形口縁の壺である。口縁端部の外側に断面三角形の凸帯をめぐらし外周に刻み目がある。灰色を呈し、焼成は堅緻である。22は弥生時代中期の亀の甲式の壺の口縁部片である。口縁の断面が直角三角形状をなし、口縁の外周に小さな刻み目を有する。淡赤褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は堅緻である。21は1次、22は2次調査時の出土。

23は黒髪式の壺である。「く」字状に外反する口縁で、口縁部上端は中凹みの幅広い面を形成し、口縁内端は内方へ強く突出するように拡張されている。黄褐色を呈し、焼成は堅緻。

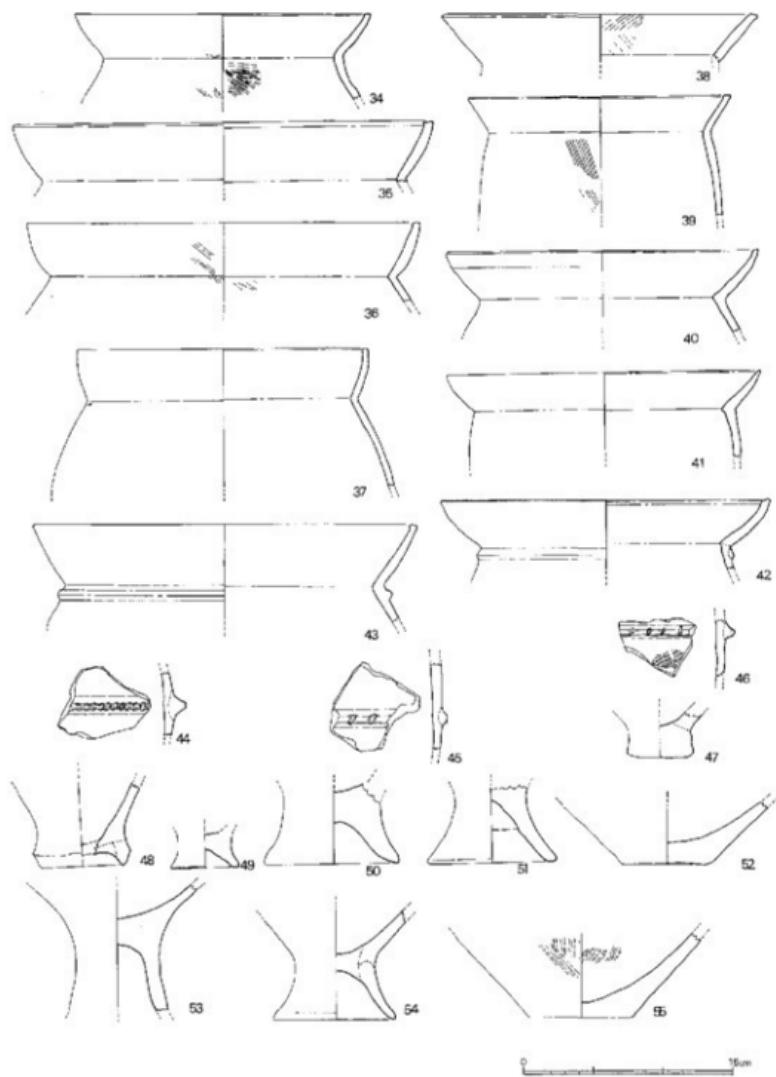
24は「く」字形口縁の黒髪式系の脚台付壺である。灰褐色を呈し、焼成堅緻。内・外面に刷毛目を施す。25、26は如意型口縁の壺で、恐らく脚台付の壺と思われる。25は灰褐色を呈し、焼成堅緻。内・外面ともナデ調整が施されている。26も灰褐色を呈し、焼成は堅緻。内・外面ともナデ調整が施されている。27、28、30~41はいずれも「く」字形口縁の黒髪式系(在地系)の脚台付壺である。27は赤褐色を呈し、焼成は堅緻。器壁は最大厚4mmで薄い。内・外面ともナデ調整を施してある。胴部の張りはあまりない。28は赤褐色を呈し、焼成堅緻。内・外面ともナデ調整を施してある。28は27に比し「く」字形の口縁の屈曲が強く胴部もやや張りぎみである。29~31は同じ器形をなす。29は暗灰褐色を呈し、焼成は堅緻。胴部外面に刷毛目を施すが胴部の上部から口縁部外側にはナデ調整を施す。30も29と色調・調整とも同じ。31は黄褐色を呈し、刷毛目調整の跡がわずかに残っている。32、33は口縁部が強く外反するもの。32は黄褐色を呈し、焼成堅緻。胴部は縱方向の刷毛目調整の上を横ナデ調整している。33は黄灰褐色を呈し、焼成堅緻。これも32と同じく斜め方向の刷毛目調整の上を横ナデ調整している。また、口縁端部の内側に沈線を入れることにより、上端部内側が押し出されて尖りぎみにふくらむものもある(34~37、40、42、43)。

34~37、39~41は口縁が内湾ぎみに立ち上がるもので、38は「く」字形の口縁であるが、口肩を外方へ攢みぎみにおさめるものである。34は口縁が内湾ぎみに立ち上がり端部を内側へ尖りぎみにおさめる。淡赤褐色を呈し、焼成堅緻。胴部の内・外面に刷毛目調整を施す。口縁部は内・外面とも横ナデ調整を施す。35は34と同様の器形のもの。明るい色調の明赤褐色を呈する。36も35と同様の器形・色調を呈する。外面に刷毛目調整を施す。37も35と同じであるが、上端部内側の張り出しがごくわずかである。38は内側にナデ調整を施している。39は外面に刷毛目調整を施している。40の色調は灰黄褐色を呈する。41は赤褐色を呈する。刷毛目調整の跡が残っている。24~33、37、40、1次調査時の出土。23、34~36、38、39、41は2次調査時の出土。

42、43は「く」字形口縁の屈曲部外面に一条の断面三角形の貼付突帯をめぐらすもので、42は口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部の内側がわずかにふくらむ。明赤褐色を呈する。43は貼付突帯が断面台形のもので、赤褐色を呈する。42、43とも2次調査時の出土。



第5図 江貝塚出土の土器② 1/4



第6図　辻貝塚出土の土器③ 1/4

44～46は断面台形の突帯に刻み目を有するもので、44は灰褐色、45は赤褐色、46は赤褐色を呈する。3点とも2次調査時の出土。

47～55は底部である。(1)甕の底部の平底のもの。(2)壺の底部の平底のもの。(3)脚台付甕の脚台の大きく分ければ3種類がある。

47は淡赤褐色を呈し、底部径が小さい。48～51、53、54は脚台である。48の脚の張り出しが小さい。赤褐色を呈する。50は灰色を呈する。53は赤褐色を呈する。54は灰褐色を呈する。壺の底部の52は灰褐色、55も灰褐色を呈する。48、50、59、53、55は1次調査時の出土。47、51、54は2次調査時の出土である。

3. 高杯

高杯は(1)内溝する椀状の杯部に脚部がつくもの(56、57)と、(2)口縁が外湾ぎみに直立するものの(58～61)とに大きく2分される。

56は口縁が短く内傾するが、杯下半部は丸みをもつもので、灰褐色を呈し、焼成は堅緻。57は浅い椀状で口縁が短かく内湾する。赤褐色を呈し、焼成は堅緻。58は暗赤褐色を呈し、焼成は堅緻。59は明るい色調の赤褐色を呈し、焼成は堅緻。60は紅色を呈し、焼成は堅緻。61は明るい色調の赤褐色を呈し、焼成は堅緻。56、57は1次調査時の出土。58～61は2次調査時の出土。(1)と(2)に型式分類したものが、それぞれ1次・2次調査時のものにきれいに2分できてしまつた。

62は鉢で黄褐色を呈し、焼成は堅緻。1次調査時の出土。63は壺の肩部である。灰褐色を呈し、焼成は堅緻。

64～74は高杯の脚部である。74は脚部の開きが大きい。61の杯部と型式的にはセットになるものか。64、65、67、69、70、71、73が赤褐色を呈し、66、68が灰色を呈す。74は黄褐色を呈する。64、66～68が1次調査時の出土。65、69～74が2次調査時の出土である。71、73が透かしをもつ高杯の脚部である。

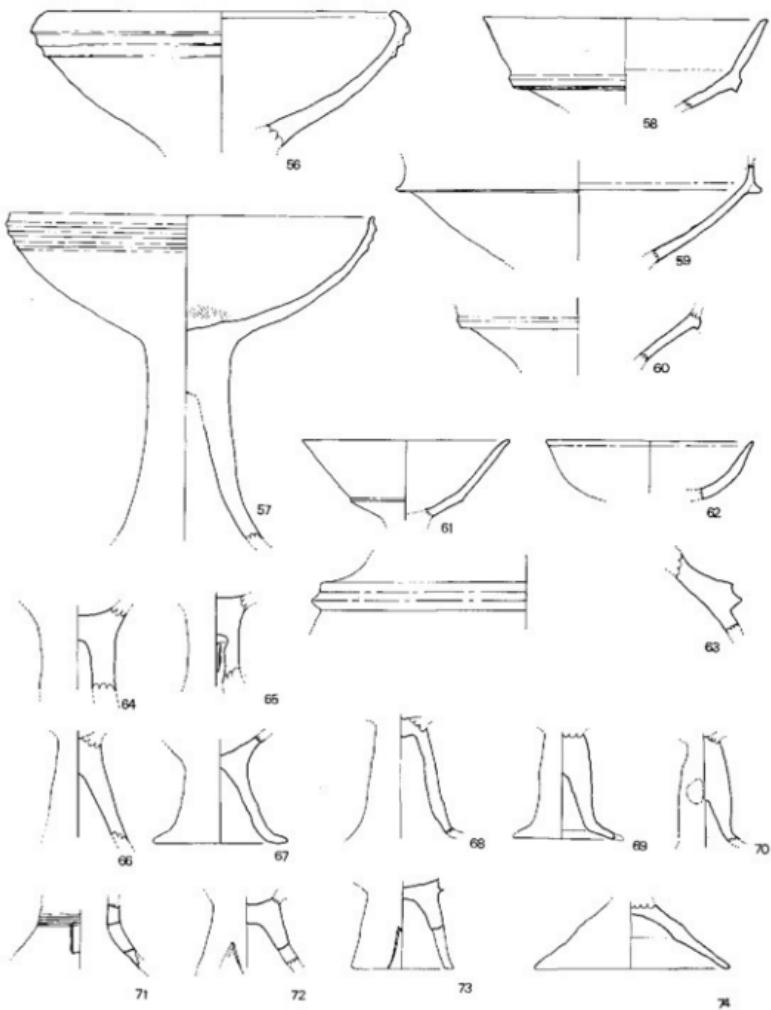
75～77は「く」字形口縁をもち平底を有する北部九州系の甕である。75は砂粒・金雲母を含み、焼成は堅緻である。灰色を呈する。76も胎土・色調とも75と同様な平底の底部である。77も砂粒・金雲母を含み、焼成は堅緻である。灰褐色を呈する。

以上みてきた弥生式土器はわずかに前期と中期の土器があるものの、弥生時代後期の前葉から弥生終末期にかけての土器を主体としている。

b. 器台・支脚・管状土錐(第9図、図版9)

器台(78～81)

部位・文様のわかる3点を図示した。78は口径22.4cmを測る鼓状器台の口縁部である。厚手であり且堅固な作りであり、外面は縱方向、内面はヨコ方向のハケ調整の後、ヨコ方向のナデが施されており、内面に丹塗りの痕がみられる。胎土に金雲母を含み、撒入品の可能性が強い。79～81は文様を持つ器台である。79は6条のヘラ描直線文を施し、内外面とも淡い赤橙色で、



0 15cm

第7図 辻貝塚出土の土器④ 1/4

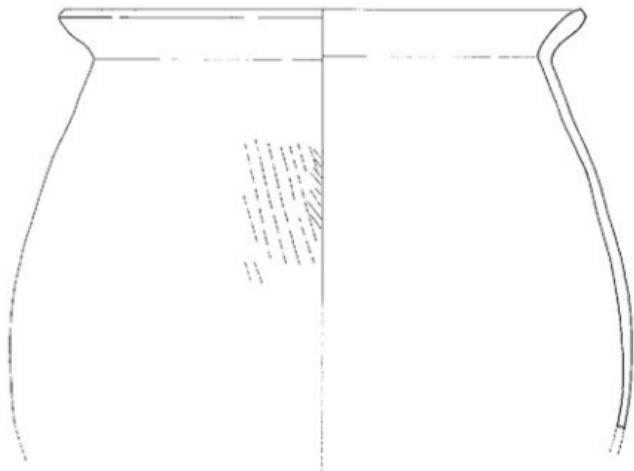
石英粒・赤色土粒を含む。80はヨコ方向に数条のヘラ描直線文を施した後、格子状の文様を描いている。81は薄手で、4条のヘラ描直線文が施され、器面は内外面ともヘラ磨きで調整されている。全て第4層黒色土中に包含される。島原半島には調部に数条の直線文をもつ器台の出土がかなりみられ、類例としては森山町西の角遺跡、北有馬町今福遺跡、口之津町三軒屋貝塚、加津佐町永瀬貝塚などがある。

支脚 (82)

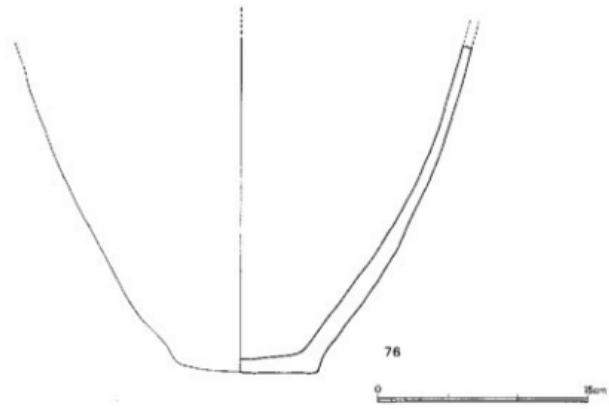
1点出土した。先端部・基部を欠損しており、現存長5.2cm、断面径2.5cm×1.9cmで、やや扁平である。淡い赤褐色で、石英粒・黒雲母が多く含んでいる。表面に鉄分の付着が見られる。

管状土錐 (83~88)

完形2点、欠損品4点が出土した。全て径3.0cm以上の大型の円筒形である。83は長さ10.3cm、径5.8cm、重さ386g、84は長さ11.3cm、径3.5cm、重さ141gを測る。胎土・色調とも、全て長石・石英粒・赤色土粒を多く含み、黄褐色～淡い赤褐色を呈す。83のような重量300gを越す超大型の円筒形土錐の出土例は全国でも珍しく、類例としては和歌山市大谷楠見遺跡で1点のみである。弥生時代終末期から古墳時代にかけてのものと推測できる。

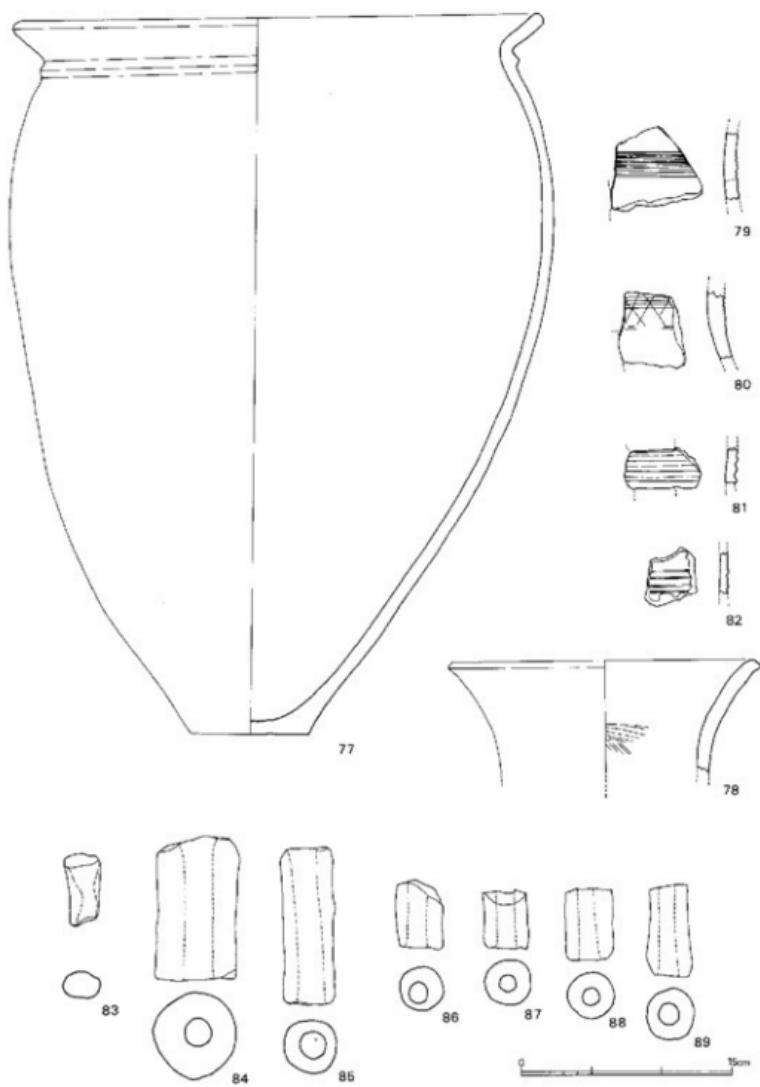


75



76

第8図 辻貝塚出土の土器⑤ 1/4



第9図 辻貝塚出土の土器⑥ 1/4

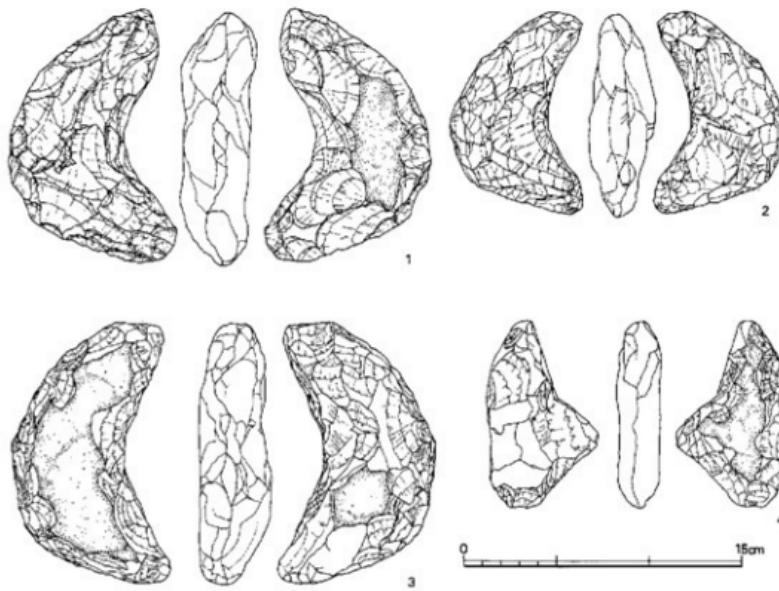
石器（第10～12図）

調査によって得られた石器は、礫器、磨石、凹石などである。なかでも注目されるのは礫器の出土である。これまで礫器については、長崎県、熊本県を中心に60箇所以上が確認されているが、特に有明海沿岸に集中している。

しかし、時代によっては製作技法に違いを見ることが出来る。縄文時代では後・晩期に出土するが、九州全域の貝塚を主体として出土している。これに対して弥生時代では中・後期の遺跡が殆どであり、比較的海岸に近ければ貝塚を伴わなくても出土する。縄文時代の礫器と比較すると弥生時代のものは丁寧な作りのものが多く見られる。

礫器（第10図 1～4）

双角状礫器、尖頭状礫器とも呼ばれ、安山岩あるいは玄武岩質の角礫や円礫を素材としている。1は周縁を三日月状に丁寧に剝離を加え、両端を尖がらせている。両面にわずかに平坦な自然面を残し、全体に剝離を加えている。特に内外の湾曲部は階段状の剝離を加えている。尖頭部から内湾部にかけては使用のためと思われる磨耗のあとが見られる。長さ13.5cm、最大幅6cm、厚さ4cm、重さ482gを測る。石質は安山岩製。2は1とほとんど法量は変わらない。尖頭部は両方とも分厚く作り出され、丸味をもち磨耗している。内湾部は1よりも浅い角度をもつ。自然面は片面に部分的に残る。全長13.7cm、最大幅6cm、重さ483g。石質安山岩。3は長さ10.7



第10図　辻貝塚出土の礫器 1/3

cm、最大幅5.3cm、厚さ3.5cm、重さ249gを測り小ぶりである。両面とも全体が丁寧に削離され、自然面は残されていない。尖頭部は、片方がやや細く長くなっている。外湾部の張り出し部は敲いたように潰れている。4は単角の小形の石器である。ピストル形になり尖頭部は鈍く磨耗している。自然面は片面だけに残り、赤味を帯び焼けた兆候が見られる。

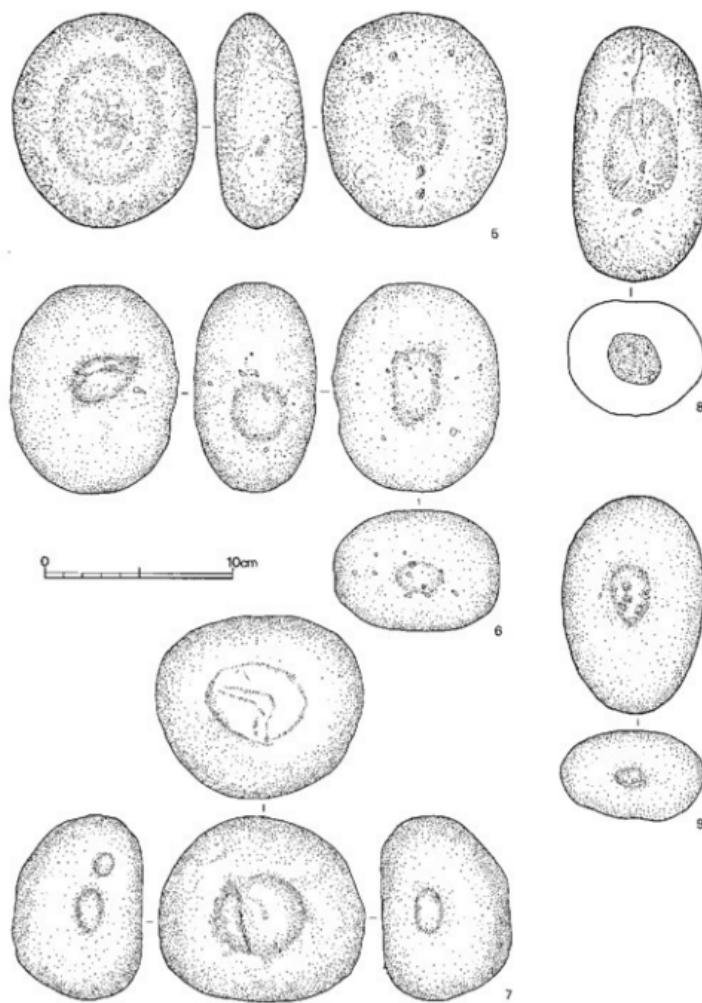
礫器の機能については從来から言われているように貝類の採捕、調理を目的とするものである。熊本県沖ノ原貝塚出土の礫器は縄文後期を主体とした層から、双角状石器と一緒に、ピック状に尖がった形態のものがあり注目された。漁師が潜って礫器によるアワビ取りの実験をしたところ成功したという。それ以来アワビなどの捕獲道具と考えられてきた。これは外洋性に面した遺跡であることも根拠となっている。一方長崎県有家町堂崎遺跡は、広大な干潟部に位置した縄文後・晚期の遺跡である。ここでは海岸の礁に混じって夥しい量の礫器と石錐が表面に見られ、漁場と調理場が一体となった、水産基地の側面をもち、礫器も使い捨てられた状況を見ていた。ここでは主に2枚貝や巻貝がその対象にされたものと思われる。

島原半島を中心とした弥生中・後期の比較的海岸に近い遺跡からは、例外なく礫器の出土が見られる。隣接のロノ津町三軒屋貝塚^{註1}、北有馬町今福遺跡^{註2}や森山町西ノ角遺跡^{註3}、吾妻町中熊台遺跡などである。本町でも当貝塚をはじめ、内野貝塚、千壇貝塚から出土している。これら弥生時代の遺跡出土の特徴は、丁寧な周縁加工を伴った双角状礫器の多いことである。しかも弥生時代石器製作が衰退していくなかで、これ程縄文的な打製石器が受け継がれることにも目を見張るものがある。

双角状礫器の場合、尖頭部を作り出していることよりも、内湾部を作り出していることこそ機能的な意味があるのではないかと思われる。堂崎遺跡もそうであるが、弥生時代の礫器を産する遺跡の環境も、今までそこ干拓などで陸化が進んでいるが、当時としては眼前に広大な干潟地が出現していたはずである。そしてこの海岸ではカキ、アサリ、ハマグリ、アカガイ、テングニシ、アカニシなどの二枚貝や巻貝が豊富に棲息していたと思われる。礫器もこのような貝の調理を主に行なったのではないだろうか。

引用文献

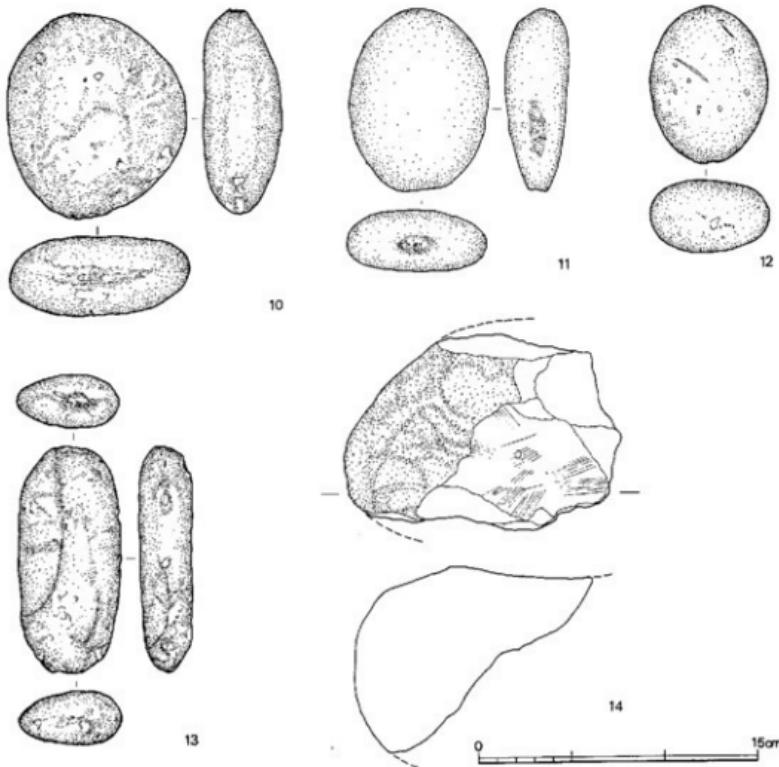
- 註1. 安楽勉編『堂崎遺跡』—長崎県有家町所在の海中干潟遺跡— 長崎県文化財調査報告書 第58集 1982
- 註2. 松藤和人他『ロノ津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』 百人委員会埋蔵文化財報告 第5集 1975
- 註3. 町田利幸他『今福遺跡III』長崎県文化財調査報告書 第84集 1986
- 註4. 高野晋司編『西ノ角遺跡』 長崎県文化財調査報告書 第73集 1985



第11図 辻貝塚出土の磨石・敷石 1/2

その他の石器（第11図5～第12図14）

その他の石器としてあげたのは凹石、磨石、敲石、石皿である。5～9は凹石で10箇の出土があった。5は両面を利用し側面も磨っている。6・7は両面および側面を利用し周辺も磨かれている。8・9は細長い円錐を利用し片面と端部が凹んでいる。ともに安山岩を素材とし、重さ300g前後である。10～12は磨石で両面および両側面も利用している。13は棒状の扁平礫を利用し、両端部を敲石として使用している。安山岩質。14は石皿の破損品である。乳白色の軟質の礫を素材としている。周縁には自然面を残す。使用面は凹み擦痕がわずかに観察される。石器の出土傾向については、礫器の項で述べた各遺跡で供給するものと同じであり、石斧、石鎌については少なくなっていくようである。



第12図 辻貝塚出土の磨石・敲石・石皿 1/2

IV. まとめ

辻貝塚の調査結果をまとめてみると次のようになる。

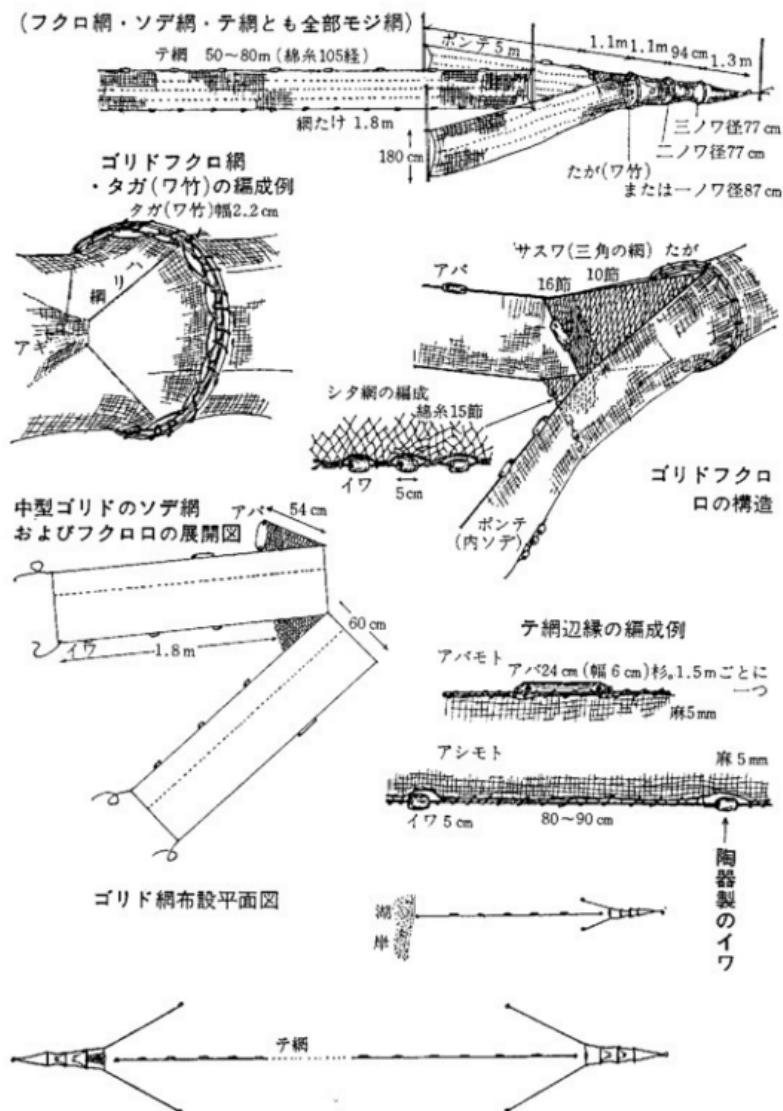
- ①辻貝塚の主体は弥生時代の後期前葉から弥生時代終末の時期である。
 - ②1辺18m程の方形にめぐる溝で区画された居住域と思われる造構を検出できた。2m50cm程の溝が切れた平坦地は、出入り口の可能性もある。また、この溝で区画された区域からは高杯が出土したが、1次調査の調査区からは宮崎貴夫氏分類の後期II期とIII期に該当するものが出土し、2次調査区からは後期V期に該当する高杯が出土しているところから、それぞれの場所で時期を前後して祭祀を行ったものと思われる。後期II、III期は前葉から中葉頃の段階で、V期は弥生時代終末にあたる。
 - ③他の弥生時代の遺跡と同じように、壺、甕、高杯、器台、支脚等の土器が出土したが、今回の調査での収穫のひとつは大形の管状土錐の出土であった。貝類の採捕、調理を目的とする礪器の山上と併せて、漁撈に依存する遺跡の性格を浮かびあがらせることとなった。可能性としては、この遺跡の南東部の堀川下流部に展開する後背湿地の潟地で網漁を行っていたことも考えられる。(参考として『八郎潟の漁撈習俗』の網漁の様子を第13図に掲載している)
 - ④今回の調査地の他、野田小学校の運動場造成の際に土器の出土があったり、この調査地の北西部でも土器の出土が知られており、また、この丘陵の東端には貝塚もあるとのことで、この辻遺跡は、およそ8,000m²程の広さがある。
- なお、今回の調査面積は108m²にしかすぎず、遺跡全体からみればほんの一部分にしかすぎず、遺跡の全体像は今後の知見に期待したい。

引用文献

- 註1. 宮崎貴夫、II弥生土器および古式土器について、『今福遺跡III』 長崎県文化財調査報告書 第84集 1986 長崎県教育委員会
- 註2. この漁撈習俗がそのまま弥生時代にあてはまるとは思わないが、もっと源初的な形での網漁が行われていたものであろう。

〈参考文献〉

- 「口之沖貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告」 百人委員会埋蔵文化財報告第5集 1975 百人委員会刊
- 「今福遺跡III」 長崎県文化財調査報告書 第84集 1986 長崎県教育委員会
- 「西ノ角遺跡」 長崎県文化財調査報告書 第73集 1985 長崎県教育委員会



第13図 「八郎潟の漁撈習俗」

「八郎潟の漁撈習俗」無形の民俗資料記録 第15集 文化庁文化財保護部より転載

図 版



1次調査風景



2次調査風景

1次・2次調査風景



2次調査 方形区画の溝検出状況（北から）



同上（東から）

2次調査 方形区画の溝検出状況



I 次調査 土層の堆積状況



I 次調査 遺物の出土状況

I 次調査土層と遺物の出土状況

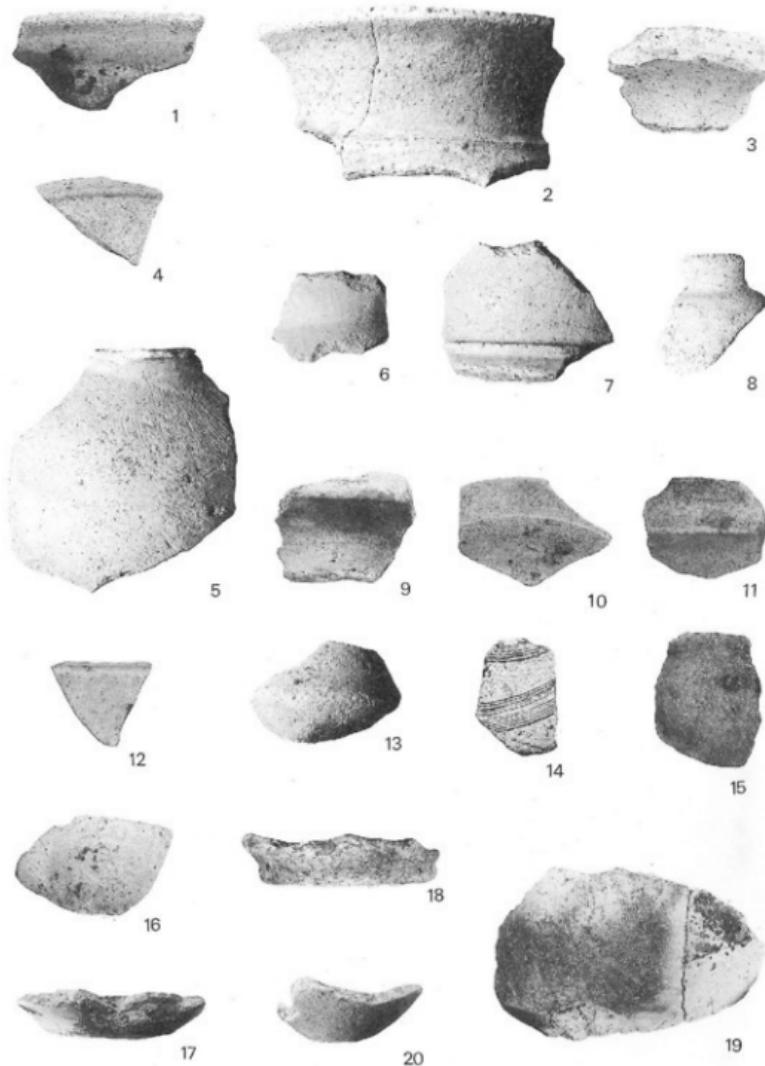


2次調査　溝内の遺物の出土状況（管状土錠等）

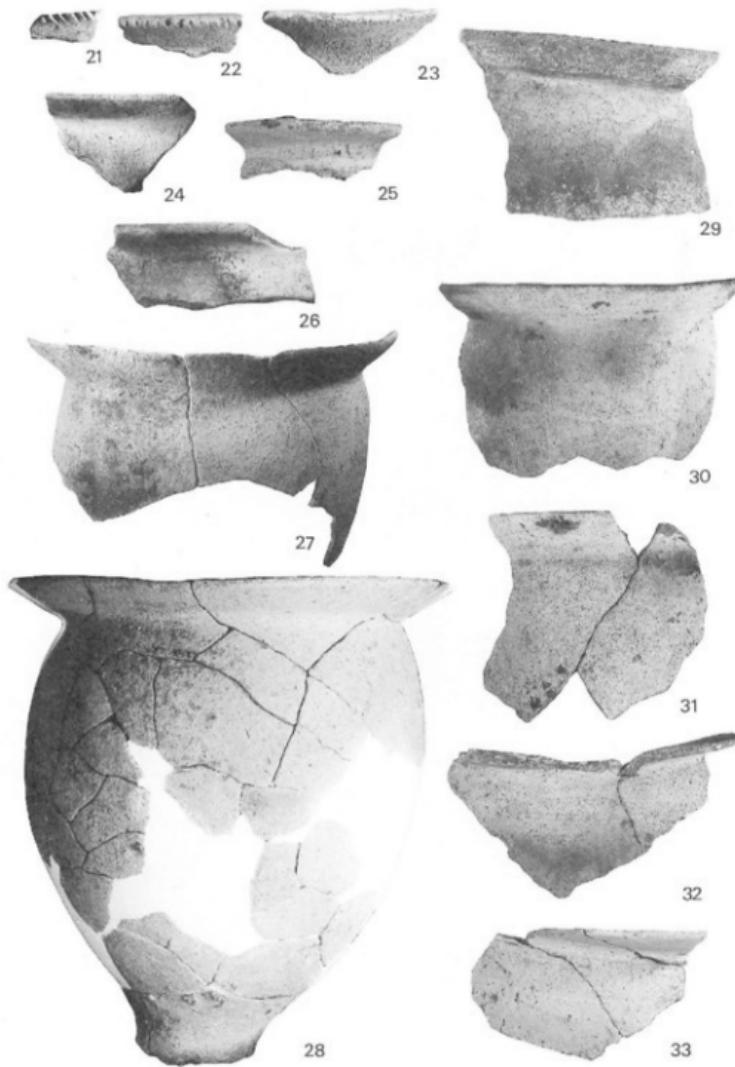


野田小学校児童の遺跡見学風景

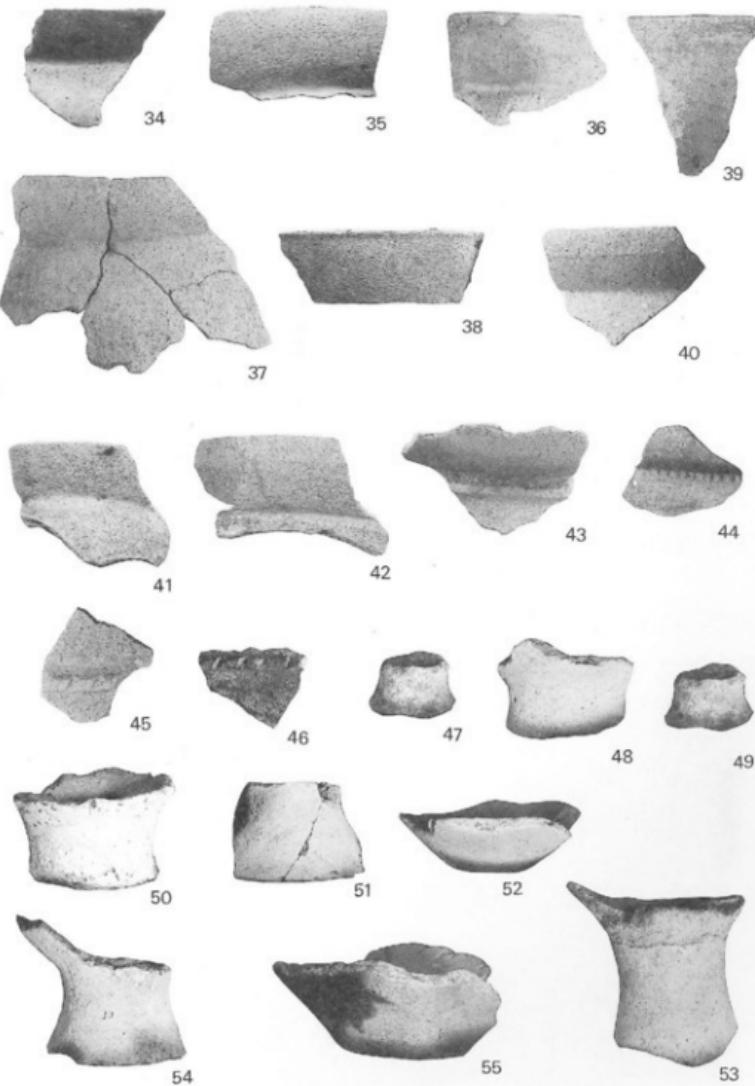
2次調査遺物の出土状況及び遺跡見学風景



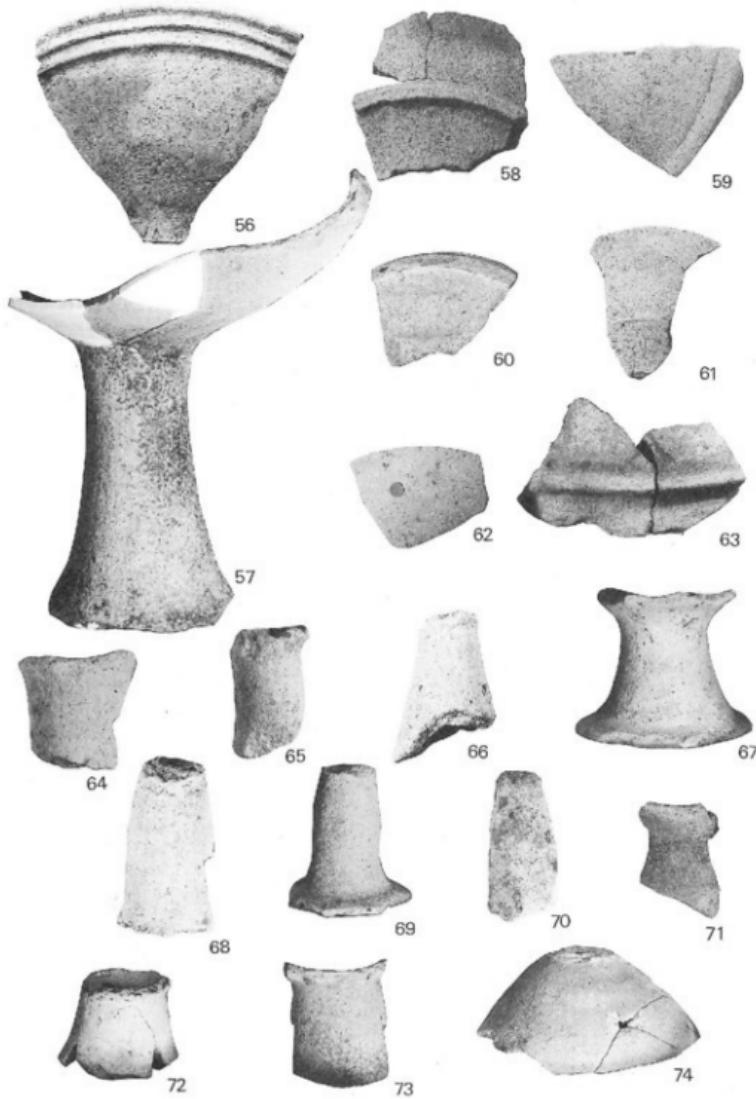
辻貝塚出土の土器① 1 / 3



辻貝塚出土の土器② 1 / 3



辻貝塚出土の土器③ 1 / 3

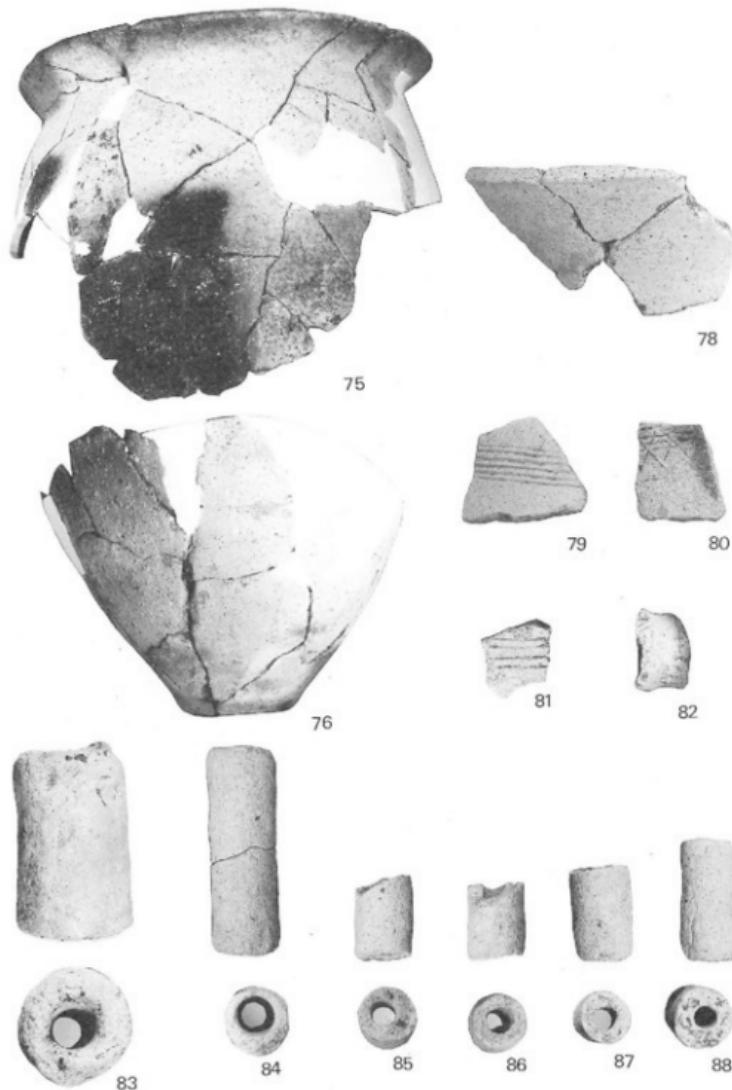


辻貝塚出土の土器④ 1 / 3

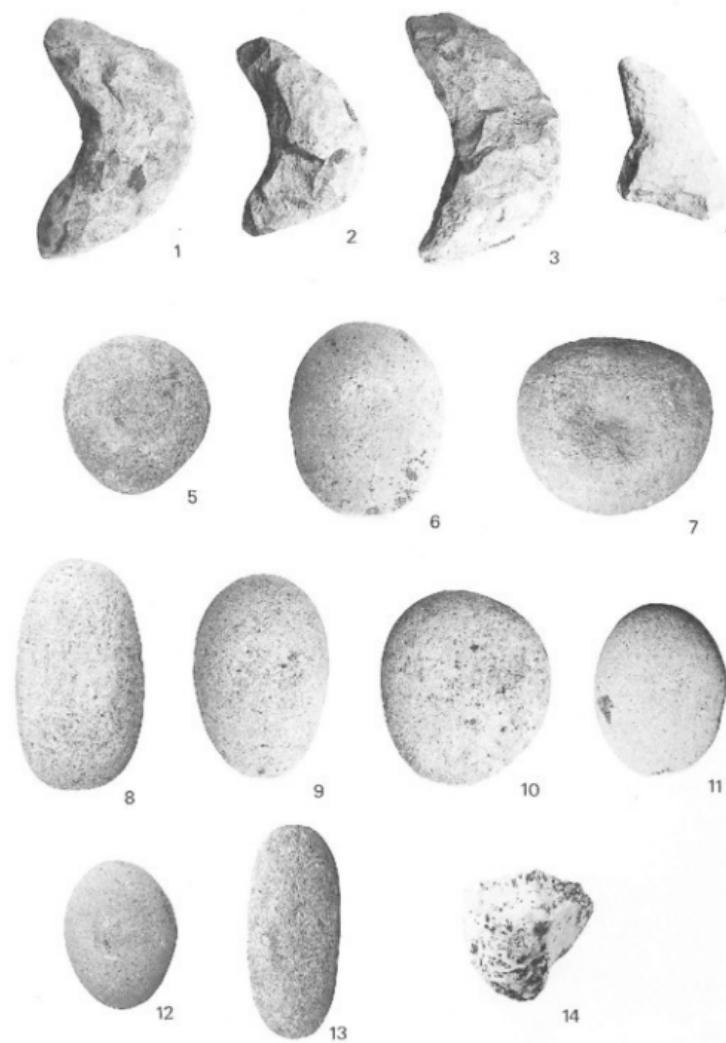


辻貝塚出土の土器⑤ 1 / 3

77



辻貝塚出土の土器⑥ 1 / 3



辻貝塚出土の土器 1 / 3

加津佐町文化財調査報告書第1集

辻貝塚

平成3年(1991)3月31日発行

発行所 加津佐町教育委員会

長崎県南高来郡加津佐町己2792番地2

〒859-26 ☎0957-87-3262

印刷所 昭和堂印刷

長崎県諫早市長野町1007

〒854 ☎0957-22-6000
